



新年にあたって

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。

今市市の「思川開発大谷川取水反対期成同盟」が昨年11月20日解散式を行なった。我々も新聞で知り、大変驚いた。国の取水決定から5年目だが、昔を知る方は感慨もひとしおなのではなかろうか。

一方で思川開発事業(南摩ダム)には主に調査費の名目で約79億円の予算が計上されるとのことである。今となっては環境破壊の無用の長物としか思えない、このダム計画に国はどのようにしてこれほど固執しなければならないのか。私たちは思川開発反対の立場から、原点に立ち返り改めて現時点でのこの開発の問題をさらに洗いなおしていく必要があるようだ。

ところで昨年11月には少し元気の出る話もあった。東大芦ダムの計画中止を記念して「顕彰の碑」が作られたことだ。その除幕式に私たちも会を代表して何名か出席させてもらった。こうした反対運動が成功した例は今でも数少なく、ましてや石碑を建ててしまうというのも、すごい発想で、やはり腰が据わった運動を展開したところはちょっと違うな、と感心したしだいである。当日は心のこもったおもてなしと、懐かしい皆さんとの再会があった。

それにつけても今市が全市あげて大谷川取水を国に撤回させた運動も東大芦ダムの中止以上に風化させてしまってはならない大事業であったといえよう。反対同盟がなくなり、三月には今市市の名称も消えるという現時点で、この事業が後世に伝えられるべく、何らかの方法が考えられるべきではと思うのだが。いかがであろうか。何も石碑を建てると言いたいわけではないが、市も取り組んだ運動ということもあり、少なくともそうした同盟関係の文書等の保存方法など今の時点で関係各位が工夫考慮されて欲しいものである。(森)

目次:

新年にあたって 1

ゆったりウォーク 2
秋の田川を歩く

いろいろ発見 3
石那田 たかお神社

石那田発電所 4

お知らせ

ゆったりウォーク
田川編(第2回)

2月19日(日)

宇都宮の里川を
のんびりゆっくり
歩きます。(詳細3ページ)

会員の皆様へ、 会費振り込みのお願い

本会は皆様からの会費で運営されています。入会の継続をお願い致します。前年度から振り込みが無い場合、通信の発送を停止させていただきます。一口1000円、一口以上を同封の振り込み用紙で郵便局にてお支払い下さい。引き続き会員として本会のご支援をよろしくお願いいたします。



日光街道と田川の間に残る、石那田発電所の用水堀。周辺の人々は「電気堀」と呼んでいた。詳しくは4ページ。

ゆったりウォーク・田川編 (今市から宇都宮へ・第1回)

11月20日(日) / 午前9時半～午後2時

秋の田川を今市から宇都宮へのんびりゆっくり歩きました。
出発点は猪倉の犬塚橋。目指すは石那田のりんご園(写真右)。



田川・赤堀川の合流点。
上に見える橋は日光宇都宮道。



集合地点：田川犬塚橋にて

田川のほとりの水神様と水車の軸



高麗神社

11月ということで寒さが心配された「ゆったりウォーク」、よい天气に恵まれて里歩きを楽しむことができました。まず出会ったのが農家の軒先に置かれた水車の軸。田川の水が動力源として使われていた証拠です。お話を伺ったところ、水神様が置かれているところその水車の台座だったとのこと。アンカーボルトもしっかり残っていました。話を聞かせていただいた上に、おいしい柿までいただきました。田んぼのあぜ道があるうちに、そろそろ越冬に入ろうとするタガメにも巡り会うことができました。あたたかい日差しの中、田んぼの脇の水たまりで最後の泳ぎを楽しんでいたのかもしれない。昆虫や魚を捕らえて生きるタガメは環境の変化で、絶滅が心配されています。



お知らせ

ゆったりウォーク・田川編 (第2回)

宇都宮の里川をのんびりゆっくり歩きます。

2月19日(日) 集合：午前9時半

国道293号 上横倉橋(地図参照)

参加費：100円(保険料など)

午前10時出発、午後2時解散予定

昼食はコース終点付近にある、そば店「保十路」で。各自負担。

雨具、ウォーキングに適した服装と靴、常備薬など

申し込み:

0288-26-3324 (塚崎)

0288-27-2183 (森)

右写真: コース途中、
「御嶽神社」よりの眺望。
眼下を田川がゆったりと流れる



いろいろ発見 - ゆったりウォーク

当会が続けている「川歩き」では思いもかけぬ発見や出会いをすることがある。現地を歩くことによって川との関わりを知ることができ、その楽しみ方も最近ではずいぶん磨きがかかってきたように思う。終着地でのリンゴ狩りを楽しみに猪倉から徳次郎に向かう田川を歩いた今回は、かつて使われていた水車の軸受け石を見つけたり、堀の溜まりで越冬中の大きなタガメを網ですくったりして、さながら子供時代の探検ごっこのような感じだった。なかでも一番のハプニングは高霧神社(たかお神社)の秋祭りに遭遇したことだった。

● 石那田の高霧神社

川を後に小高い丘に登って行ったら、前方に私達を招き入れてくれる人を発見。私達17人と犬一匹が案内された所は秋祭り真っ最中の神社だった。鳥居の上の額を見たら、高霧神社と刻まれている。かつてはこの時期、新嘗祭(にいなめさい)でさぞかし賑わったことだろう。桑原(かばら)・仲根・岡坪・坊村・仲内・六本木・原石那田の、7つの集落の氏子が今も静かに神社を守っている。今年は仲根地区が当番なのだそうだ。「いっぱいあるから食べてー」と境内で振舞われたおいしい甘酒やおでんは、昼食前のお腹にあつという間に収まってしまった。そして私達をととても感激させたのは、見ず知らずのグループであるにもかかわらず、収穫の喜びを共にしようと私達を招き入れてくれた氏子の方達の暖かい心くばりではなかったらうか。

● たかお神社はタカオカミ神社。水の神を祀る

同名の神社は今市にもいくつか存在している。10年ほど前、ダム問題を探る東京のグループとの会合がきっかけで、大室の浅田邦三郎さんの水車を見に通ったことがある。その時、浅田さんに勧められたのがすぐ近くにある高霧神社だった。ここで少しこの神社について触れてみたい。

霧神(オカミガミ)とは雨や水を司る神のことで、山の上に棲んでいる神を高霧(タカオカミ)、谷底に棲んでいる神を闇神(クラオカミ)と呼ぶのだそうだ。この神の一番古いルーツは、奈良県の吉野川上流に建つ丹生川上神社上社(にうかわかみじんじゃかみしゃ)。全国に霧神を祀る社は無数にあるそうで、オカミサミットが1997年から開催されている。霧信仰を研究している筒井迪夫氏(東大名誉教授)によれば、「霧の字は、口々に龍を祈りて雨を乞うと覚えるとい」ということで、大室の神社も参詣口の石柱には「霧」が刻まれていたと思う。最近、「高霧神社」と看板に記されているが、元々は「高霧神社」で、本来の性格は水の神であつたらう。

● 素朴な祈りの復活を

四季が豊かに彩られる我が国では、自然の中から生まれたたくさんの神々がいろいろな場所に宿っている。異常気象が目立ち始めた今日、水を畏れ、水を恃む心を謙虚に受け止める時代に入ったように思う。素朴な神々達を迎え入れる、かつての暮らしのなかに確かに息づいていた思いをもう一度招来させてもいいのではないだろうか。現代を生きる私達にも畏れは必要だと思う。

大樹に守られ、7つの集落を見下ろして建つ石那田の高霧神社。稲作に不可欠な水の恵みを祈る人々の思いをたどるため、もう一度ゆっくり参詣したい場所のひとつになった。

石那田発電所

私の母は「篠井村」で育ち、結婚して今市に来た。日光街道を宇都宮に向かい、石那田を過ぎると、左手に日光道中名残の一里塚が立っている。近くのバス停も「一里塚」という。そこから小林に向かう道を数キロ入ったところに母の実家があり、子どもの頃「一里塚」から歩いて遊びに行った。

何年か前、地域の有志が「篠井ガイドブック」という本を出したことを新聞で知り、母もほしいというので、公民館に行って分けてもらった。この本を手にしたとき「石那田発電所」の記述があった。どのあたりだろうと思いがながら、そのまま忘れてしまっていたが、今回の「田川ウォーク」の折りにふとそのことを思い出した。りんご園の方に「発電所は」と伺ったところ、その跡地はすぐ近くだという。そんなわけで思いがけなく石那田発電所跡地を訪れることができた。

「篠井ガイドブック」(229ページ)に、「宇都宮市内に本格的に電灯が点き始めたのは、宇都宮電灯会社が市内の電力供給を目的として、1902年(明治35)に篠井村石那田に田川、赤堀川の水を利用して発電が開始されてからである。(中略)当時、2台の発電機で認可出力200キロワットで約15キロメートル離れた宇都宮変電所(現宇都宮中央郵便局付近)に3000ボルトをもって送電を開始し、勤務員3名、人夫7名で発電事業が進められた」とある。ドイツ人技師3名が指導し、水車軸よりベルト掛けで発電機が運転された。20世紀初頭に動き始めたこの発電所は、1963年に電力事業の近代化によって廃止されるまで、約60年間動き続けたという。

小学生の私が母の実家に遊びに行くために、「一里塚」でバスを降りたとき、近くで「石那田発電所」は稼働していたのだ。それを思うと、感慨深いものがある。出力電力は現在私たちが使用している電気エネルギーと

連絡先

〒321-1102 今市市板橋1732-1 森方
今市の水を守る市民の会

郵便振替口座

00140-4-535550

0288-27-2183 (8時～17時:森)

0288-26-3324 (17時～21時:塚崎)

<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

は比べものにならないほど小さい。しかし、こんな身近なところで電気を作り、利用していたのだという事実は、未来のエネルギー事業のあり方を考える上で一つのヒントを与えようと思う。

そんなことを考えながら、「電気堀」と呼ばれていたという場所を眺めた。跡地といっても、そこに溝が掘られていたのが想像できる程度で、どこに水車が設置され、どこに発電機があったのかよくわからない。「ゆったりウォーク」を寄り道して調べてみるわけにはいかず、今回はひとまず場所を確認するだけであった。また機会を作り、地元の人のお話を聞きながら、この発電所についてももう少し詳しく調べてみたい。(手塚)

資料「篠井ガイドブック」編纂委員会(平成14年2月1日)

コウホネの里 地域資源講座

第1回

ポスト・グローバル化時代のむらづくり

- グリーンツーリズムに対応して -

基調講演 三橋伸夫 宇都宮大学教授

日時: 2月4日(土) 午後1時半～4時

会場: 落合公民会(落合中学校体育館隣)

内容:

三橋先生を囲み、グリーンツーリズムに対応した各地の取り組みをスライドなどを使って学びます。落合地区でさまざまな取り組みをされる方々とともに落合地区の可能性について考えていきます。

主催: 小代を愛する会

編集後記

家の本棚に「南総里見八犬伝」が並んでいる。岩波文庫版(1937～1941年)を改版したものである。買ったまま背表紙を眺めるまま20年も過ぎてしまった。正月特番「八犬伝」テレビドラマに、読み始めるきっかけにとチャンネルを合わせてみた。原作は曲亭馬琴によって27年の歳月を要して書かれた。長大な話が単純化され、全10巻中1巻目の内容はずいぶん切りつめられ、はじめの10分くらいで終わっているのは、時間の制約で仕方ないことである。けれど、仁義礼智忠信孝悌の八つの玉に導かれた剣士が「大切な人を守るために戦う」とか言うのには変な感じがした。この物語は戦国の世を舞台にしたファンタジーである。義のためでも戦えば人が死ぬ。人が死ぬから戦いを回避するという筋立ては、最初から無い。昔々の物語から未来の戦争物まで、同じように「愛する・・・を守るため」などとワンパターンで主人公が戦う話が目立つのは気のせいかな。なぜ剣士たちは戦ったのか、「八犬伝」を読みながらゆっくり考えてみようと思った。(T)